ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第一号（通巻第一四五号）

鈴

ぐろっけ

創刊12周年

第145号

5. 2006

俳句雑誌

GLOCKE

笑門（しょうもん）

品川鈴子

麦は穂となる笑門の隠居棟

磯小屋は花にあづけて漁へ出づ

匕首（あいくち）を残し海女小屋戸も閉めず

海女発ちし波止にちらかるゴム草履

PDF= 俳誌の salon

海女草履外輪内輪に脱ぎつ放し

半刻(はんとき)の勝負へ海女ら相乗り舟

龍宮へ入りゆく海女か肌透けて

追ひ風に鷹よろけ飛ぶ熊野灘

貝釦(ぼたん)つくる工場に八重桜

互ひに子無くてカーネーション交はす

PDF= 俳誌の salon

玉鈴吟

茨城　三輪　慶子

漬樽の蓋たしかむる霜夜かな
風冴えて筑波双峰近うせり
足らざるを思い知る夜や霜の声
ふかふかの畑踏むなり春立つ日

愛媛　村上　和子

絵手紙のモデルの浅蜊汐飛ばす
寒菊の運ばれてくる葬の家
負け独楽の稽古不足を児が悔む
年金は亡夫の足跡冬木の芽
寄贈して霊木となる寒桜

大阪　師岡　洋子

灯の入りし五条大橋寒念仏
機音や千本格子に雪降つて
牡丹雪しんしん母の丸き背
借りて着る母の匂ひのちやんちやんこ
落葉焚く小さき火種を手で囲ひ

兵庫　八木柊一郎

病むわれに大寒几帳面過ぎる
かりそめの二人となりて梅の里
竹林の奥まだ暗き寒の明け
山木みな小さき芽をもち春の雷
指櫛に応へなき髪春来たる

東京　安田とし子

飛び石の形まちまち春の雪
放たれし春野にあふれ子等のこゑ
抱き上げし子の手に触るる柳の芽
春寒にきざむ葷菜色匂ふ
水温む魚影くるりと向きを変へ

香川　合川月林子

目瞑りて白魚一気をどり食ひ
啜り食ふ白魚は眼で数へつつ
白魚の命のみ込む朝の膳
声かぎり早春の野へ叫びたし

PDF= 俳誌の salon

大阪　赤木　真理

酢海鼠に酔へばすぐ寝る父であり
煮凝や亡父がまたも夢に出て
工場の街に嫁ぎて菜の花忌
コロッケの甘さほのかに菜の花忌
豆をまく後の掃除を思ひつつ

兵庫　秋田　直己

碧い眼を招くと家の畳替
積雪に足跡残す早出番
節分の鬼となる子にヘルメット
センサーに子猫再び現われず
思案して時計台見る受験生

愛媛　足利　錞子

弦音を高く響かせ弓始め
二日はや離郷の人ら駅頭に
初鏡薬害の頬腫れ引かず
姉かつて裁縫師匠針供養
青鷺の悪声残し舞ひ上る

愛媛　足利　徹

雨ごとに艶ます幹よ春動く
樹の肌を雪解雫のつたふなり
雪解けて峡に水音戻りけり
藁屋根に名もなき草の萌えにけり
採れ過ぎて配つて歩く蕗の薹

大阪　尼嵜太一郎

牛馬童子に屈み差し掛く時雨傘
煤逃げと三途の川を渉られし
雪載せて庭師の車やつと来し
乾杯のコップがマイク年忘れ
子等来ると小さき聖樹を食卓に

兵庫　荒木治代

初神籤読みつつ眼元ほころびぬ
ちやんちやんこ見栄も誇りもなき目尻
憂さ晴らす酒も不器用着ぶくれて
蔵の窓牢獄めきて月冴ゆる
丼に黄身がとろりと春隣

PDF= 俳誌の salon

薬草歳時記

（一四四）アカザ・シロザ（藜・白藜）

三輪慶子

宿りせん藜の杖になる日まで　芭蕉

歳時記のアカザの項を開くと先ず芭蕉の句があります。アカザが大きくなって杖になるまでゆっくり滞在させていただきますよ。杖ができたらそれを持って出かけましょうとでもいうようなやさしい挨拶句です。宿は何処か、主は誰か。不精なわたしは自分で調べもせず、東京ぐろっけ句会の連句の席でお尋ねしてみました。たちまちＦＡＸで「笈日記」のコピーが送られてきました。昨年からの連衆のお一人山崎辰見さんからでした。オープン・カレッジで勉強中の氏ご自身の要約を引用させていただきます。

「芭蕉は貞享五年五月上旬まで京都に滞在し、去来を訪ね、凡兆・湖春などとも会っている。芭蕉の京都滞在を聞きつけた岐阜妙照寺の住職己百は、京都に芭蕉を訪ね岐阜に来てくれるよう頼む。芭蕉は吉野に行ったり、京都近郊を見物したりしてのんびり過ごしていたが、度々の誘いに折れて岐阜を訪れ、己百の寺妙照寺に落ち着いた。」

藜の宿は岐阜の妙照寺、主は住職の己百ということが判りました。

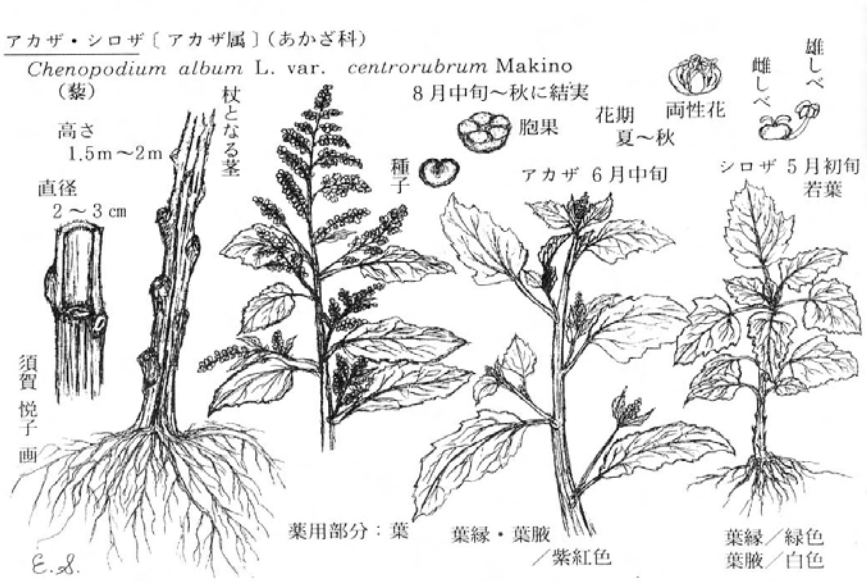
アカザはあかざ科の一年草でかなり古く中国から渡来し、野菜として栽培されたと思われます。芽心や若い茎葉が赤いのがアカザ、若葉が緑のものをシロザといい、どちらも粉状毛で覆われています。うちの近くではアカザは珍しく殆どがシロザです。ビタミンＡ、B_2、Ｃが多く若葉を茹でて食用にします。乾燥した葉を煎じた汁でうがいをすると歯痛によいと言われています。虫刺されには生の葉の汁を直接塗りつけると効くかもしれません。ホウレンソウと同じく蓚酸が多いのです。戦時中は食用にしたかもしれませんが、現在は同じあかざ科のホウレンソウのほうがおいしいので利用されません。今はやりの野草料理として、ゴマ味噌和えなどがよいようです。

三十年近く前、練馬からここ牛久へ引っ越してきましたが、目の前の畑は荒れて背丈ほどのアカザが威張っていました。杖になる草とはこれなのかと納得したものです。その畑を今は自分で耕作していますが、アカザは厄介な雑草です。目立たぬ小さな花が密生し種子となって畑に落ちるとまるでアカザ畑になってしまいます。アカザの杖は軽く手にごつごつあたるのが中風予防になるとか。」不精の畑にアカザの杖が育ったら皆様にお配りしましょう。

参考文献「原色牧野和漢薬草人図鑑」北隆館

著者略歴　神戸薬科大学卒

PDF= 俳誌の salon



鎌とげば藜悲しむ景色あり　高浜虚子

焼跡やあかざの中の蔵住ひ　村上鬼城

鎌かくる露金剛のあかざかな　飯田蛇笏

雑草園藜の杖を育てをり　山口青邨

隠栖に霰いつぱいの藜かな　阿波野青畝

藜伐つて遠く小さき山を見る　長谷川零余子

杖となる藜に石を落す山　宇佐美魚目

すなどりのもの置く露の藜かな　木村無城

藜長く空家のままの我が生家　棚山波朗

先生の畑に藜さかんなり　細野恵久（ぐろっけ）

PDF= 俳誌の salon

鈴の奏

兄逝きて疎遠なる義姉初電話　兵庫　中尾　廣美

枯木谷芥で埋めダンプ過ぐ

家たたむ友に寄りそひ霙道

歌留多とり少しのずるは見逃して

雛選ぶ吾子がこれだと言えるなら　大阪　島本　知子

にぎわいにつられて入る雛の店

本当の値段はいくら雛の店

店員がすぱっと抜きし雛の首

蟹股でチェロ弾く女春うらら　兵庫　津田　霧笛

初鑼の声聞きたくて浜へ出る

春隣灘の正宗喉を越す

旧正のランタンの下夜光龍

寒餅の中に湿りし母の文　兵庫　内山　芳子

下萌えの喜春城あと空襲碑

飯蛸の雄は半値で売られをり

魔除け木偶(でこ)貫ひしバレンタインの日

自転車の空気ぱんぱん花菜風　大阪　宮村フトミ

品川鈴子選

寒満月抱きし供華を十字路に

焼いもの一盛三こ目分量

地下道を出でて並木の芽ぶき晴

ひがみ癖少し直りて日向ぼこ　兵庫　岩崎可代子

足踏器歩数確かめ冬籠

注連突つく雀が餌とも玩具とも

未だ人の来ぬ石庭に衾雪

引つ越し荷おほかたほどけ春立ちぬ　兵庫　唐鎌光太郎

初老なる夫婦引つ越し春の風邪

暮遅し孫に手ほどきボール打ち

いとまする娘駅まで春夕べ

春泥に落してきたり発句一句　兵庫　高橋　照葉

犬ふぐりこの青空は余呉のもの

白鳥の内股歩き下萌ゆる

葉牡丹の渦の真白き始発駅

煤竹の一輪挿しに寒椿　兵庫　水上　貞子

新年会何時しか愚痴をこぼし合い

PDF= 俳誌の salon

秀鈴記

歌留多とり少しのずるは見逃して　　中尾　廣美

従来の歌留多取りは、文学的な情緒深い遊びで、心の通い合う仲間ができ、少々の横着など目くじら立てずいたわり合い、歌心を味わいつつ楽しみました。

最近のテレビで見ると単なる早技競争、スポーツと化して襷掛けの仇討ちの様相で取札を跳ね飛ばす。これでは優雅な歌留多が泣くでしょう。家庭では優しい目こぼしもお忘れ無く。

店員がすぱっと抜きし雛の首　　島本　知子

初雛を選ぶ親心は、わが子の末永い幸先を願って、店いっぱいの雛を見比べては店員と相談し、肝心の一点に絞り込む。熱心な店員は頭(かしら)や衣装を、組立て過程から説明するため、ふいに首の継ぎ目を抜いて観せた。制作現場では見慣れた状態かもしれないが、客側は人形に魂を感じているので、ぎょっと驚いた。

巻頭三句　品川鈴子　評

四句～十五句　竹下昭子

〃

旧正のランタンの下夜光龍　　津田　霧笛

旧正月を今も賑やかに祝い、龍を縁起ものとする中国か台湾系の店飾り。めでたい赤づくしの店先にはランタンが揺らめき、その灯に映えて夜光塗料で画いた龍が、一際活々と輝き人目を惹く。景気上昇の只中。

寒餅の中に湿りし母の文　　内山　芳子

お母さんはいつまでも有難い存在です。宅配便という便利なシステムがありますが、少しでも早く、出来たての柔らかいお餅を届けたい気持が、冷めやらないお餅を包まれたのでしょう。そこに添えられたお母さんの手紙が湿っています。読まないうちからひしひしと愛情が伝わってきます。

自転車の空気ぱんぱん花菜風　　宮村フトミ

PDF= 俳誌の salon

「空気ぱんぱん」、何と楽しい生気の良い言葉でしょう。淀川堤でしょうか。菜の花畑を吹きぬけてくる風を受けている女子学生でしょうか。元気のいいおばさんでしょうか。生き生きとした春景色まで目に浮かびます。

未だ人の来ぬ石庭に衾雪　　岩崎可代子

「未だ人の来ぬ」とあるので、京都の龍安寺でしょうか。観光の人達でさえ、石庭という雰囲気では、黙想をしたり声をひそめたりと、比較的静かなのですが、誰も来ていない石庭の雪景色。凛とした、幻想的、禅的な美しさが感じられます。

そして、「衾雪」とは衾(夜具)のように多く積もった雪(広辞苑)とありますので、王朝貴族の夜具を想像させ、風格のある石庭がよく表わされていると思います。

いとまする娘駅まで春夕べ　　唐鎌光太郎

幾つになっても娘は愛しいもの。まして結婚した娘が「さよなら」と帰って行く。駅まで送りながら離れがたい切ない父親の気持が「春の夕べ」の様にと娘の平安を祈らずにおれないのです。

犬ふぐりこの青空は余呉のもの　　高橋　照葉

滋賀県北部、伊香郡にある余呉湖。

待ち兼ねた春の到来に作者の嬉しさが溢れています。雪の消えはじめた道端にきらきら青い宝石を鏤めたような犬ふぐりの花。青空にとても似合う愛らしい花が一層春の喜びを際立たせています。

煤竹の一輪挿しに寒椿　　水上　貞子

一輪挿しに寒椿が活けられているという、日常の何気無いひとコマですが、「煤竹の一輪挿し」ということで煤竹の色と赤い寒椿。椿が明るく映え、寒そうな玄関やお座敷、廊下がほっと心和みます。

PDF= 俳誌の salon